

この記事の問い合わせ先：
ショウナ・シューダ
メディア広報上級スペシャリスト
630-468-7075
Shauna.Schuda@LionsClubs.org

即時リリース用

ライオンズクラブ国際平和作文コンテストにおいて、オーストラリア・ブリスベン在住の中学2年生、ジョシュア・ウッド君が大賞を受賞

(米国イリノイ州オークブルック発) – オーストラリア・ブリスベン在住のジョシュア・ウッド君（13歳）は、世界における平和について、独自のアイデアを持っています。ジョシュア君は、自らの力強い作文を通じて、そのアイデアに命を吹き込み、ライオンズクラブ国際平和作文コンテストで大賞を獲得しました。

ライオンズクラブ国際協会のジュンヨル・チョイ国際会長はこう述べています。「ライオンズクラブ国際平和作文コンテストは、これまで以上に親切で平和な世界をもたらす方法に対して、自ら強い意見を持った若者たちの声を汲み取ります。私たちは、世界中の子供たちの独創的なアイデアを支援できることを誇りに思っています。地域社会への地道な奉仕を通じて、平和をもたらすことが出来るのです。」

国際平和作文コンテストは、目の不自由な青少年に平和への思いを表現する機会を与えるもので、世界中のライオンズクラブの主力事業となっています。ライオンズは地元の学校や家族と協力して、このコンテストへの参加に関心があり、恩恵を受ける可能性のある青少年を見出します。

「僕の目には生まれつき、まれな網膜異常があり、読書をするには点字を使います」とジョシュア君は話します。「僕が他の人たちに伝えたいことは、たとえ障害があっても、素晴らしいことを成し遂げることも、他の人々に前向きな影響をもたらすことも出来るということです。」

大賞受賞作文「平和と奉仕が手を取り合って」は、その独創性や優れた構成、そして作文コンテストのテーマである「奉仕で平和を実現しよう」の表現力によって選ばれました。ブリスベン・キャンプヒル・カリンデール・ライオンズクラブが、地元でのコンテストをスポンサーし、この中学2年生に世界的なイベントへの参加、そして彼の平和への言葉を世界に共有する機会を提供しました。

スポンサーしたライオンズクラブのビル・ダール会長は、「ブリスベン・キャンプヒル・カリンデール・ライオンズクラブの会員たちは、ライオンズクラブ国際平和作文コンテストにおいて大賞を受賞した、ジョシュア・ウッド君の功績を非常に喜んでいます。ジョシュア君は、この受賞において決意と謙虚な姿勢を見せてくれました。彼の家族からの支援は絶大なものでした」と述べています。

ジョシュア君はその作文で、彼の祖父の目を通して、そして他の人々に奉仕をすることの意味について祖父が語ってくれた話を通じて、平和についての考えをつづっています。ジョシュア君は、彼の作文がきっかけとなって、人々が障害を持っていたり困難に直面していようとも、他の人々に手助けするようになることを願っています。

ジョシュア君は、次のように述べています。「平和についての作文は、重要な意味があります。人々が平和について考えるきっかけとなるだけでなく、それを実現する方法を考えさせるからです。僕はもっと平和な世界、人々が心の平穏を見つけられるような世界に住みたいです。数々の問題や紛争は、人々が他の人々のことを自分のことのように考えることによって、もっと平和的なアプローチで解決できるはずだと信じています。もっと根気強く、親切で、他の人を助ける意欲があれば、もっと平和な社会を築くことが出来ると信じています。」

このコンテストの大賞受賞者として、ジョシュア君には 5,000 ドルの賞金が贈られます。ライオンズクラブ国際協会のウェブサイト (lionsclubs.org/peace-essay) から、彼の作文やコンテストの詳細を閲覧できます。

ライオンズクラブ国際協会は、世界 200 を超える国と地域の 140 万人以上の男女が集まる世界最大の奉仕クラブ組織です。ライオンズは、世界中の青少年の心に平和と国際理解の精神を育むために平和作文コンテストを行うようになりました。

平和と奉仕が手を取り合って
作：ジョシュア・ウッド

幼い頃、祖父と手をつなぎながら歩いたことを、私はよく覚えています。祖父はとても賢く、その白髪は彼の見識を表現しているようでした。彼の手はカサカサしていて、硬く感じました。彼の指を使って本を読む子供にとっては、その硬さはなおさらでした。

何年も後になって、彼の葬儀に参列した時に、私は彼のカサカサした硬い手の意味を認識しました。それは、私が幼かった頃、私の手を握り、私を導いてくれた手でした。また、私たちの国の自由を守るため、戦争に行き、自らの安全を犠牲にした若者の手でもあり、戦地で死んでいく仲間を抱えた手でもありました。そして、地域の高齢者の芝生を刈ってあげた手でもあり、彼の奉仕に対しメダルが贈られても、自分の行いは称えられる必要はないと感じそれをつけることもしなかった人の手でした。奉仕の意味を本当に理解していた人の手だったのです。

私の祖父は、奉仕の重要性だけでなく、地域社会の平和や人々の心に平穏をもたらす上で奉仕がいかに役立つかということ、何年も前に私の心に植え付けたのでした。私は、頻繁に世界での紛争や戦争、様々な戦いについて考え、多くの人々の命が失われていることに悲しみを感ずります。

また、祖父がいかに見返りを求めず、人々のために無欲の献身をしていたかをよく思い出します。「ジョシュアは目が不自由でも物事の本質を見抜く力がある。そちらの方がもっと重要だよ」と祖父は私に言ってくれたことでしょう。

私たちは多くの先駆者から刺激を受けることができます。インドの貧しい人々に奉仕したマザー・テレサ。恵まれない人々への献身に自らの人生をささげた、救世軍の創設者、ウィリアム・ブース。私に最も感銘を与えた人、目と耳が不自由でありながら、奉仕に人生をささげたヘレン・ケラー。彼女は、自ら障害があるにもかかわらず、第一世界大戦で盲目になった退役軍人を助け、慈善団体を設立し、目の不自由な人や貧しい人を支援するとともに、米国盲人協会を 40 年以上に渡り率いました。他の人々のために奉仕を行った、これらの類まれな人々とその行いは、貧しい人々、傷ついた人々、飢えている人々に安らぎをもたらしました。

「本当に幸せな人々とは、奉仕をする方法を見出した人だけだ」という、アルベルト・シュバイツァーの言葉に私は共感を覚えます。

私は祖父と約束をしました。奉仕をすることについて、そしてそれが他の人々の平和を促進するだけでなく、多くの人々が求めている心の平穏をももたらすことを広く伝えていくと。私は自分に障害があっても、他の人々に奉仕を行うことが出来ます。自分のこ

とだけに目を向けるのではなく、他の人々に寄り添いたいと思います。奉仕を通じて、平和を実現できることを他の人々に伝えていきたいと思います

「奉仕の実は平和」という、マザー・テレサの言葉があります。私の人生に奉仕の種をまくだけでなく、他の人々にもそうするよう呼びかけていきたいと思っています。何年も前に祖父と私がそうしたように、平和と奉仕は手を取り合って歩んでいるのです。